星座占いなんて信じないっ！改

ぷうぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星座占いなんて信じないっ！改

【Ｎコード】
Ｎ９９５８Ｚ

【作者名】
ぷうぺ

【あらすじ】
処女作であった物の続編という形で書かせていただきます。
女子高生と大人の純ではない恋のお話ですね。はい。
主人公やる気ナシです。だらだらしてます。捻くれてます。

プロローグ

「那央(なお)ちゃーんっ！」

「なに？」

・・・ これからご飯食べに行くから

7個上の姉とそんな会話をしたのが僅か１０分前

アリエナイダロコノ状況

何が楽しくて合コンの席に居ねばならんのだ

しかも

ただの合コンじゃない。

平均年齢２３という大人な合コンなのだ

「美弥(みや)…

あんた何持って来たの…？」

そう言うのは今回の合コンの幹事　早由(さより)さんだ

持って来たとは失礼な

ちゃんと自分から付いて来ましたわ

…こんな事だと知っていたら絶対来なかったけどな

「や、あのね…
ぁぁぁぁあのっ！…
合コンだとは思わなくて…
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいいいいいいいいい！」

そう涙声で謝るのは今回の事件（？）の張本人

なんだかなぁ…

未成年であるアタシには、大人な合コンなんてレベルが高すぎる
その前に、合コン自体経験した事がない

ご飯食べに行こうと言われ、既に予約されていたらしい個室に入ったら
いきなり大人な方々とご対面
妙に気合い入ってる女性陣と、やる気漲る男性陣が対面して座っており、その人数が今来たアタシ達をいれてちょうど５：５になる
ここまで分かれば導き出される答えは一つ

合コン

おねーさま方、おにーさま方と目が合った瞬間思い出したのは今日

の星座占い
確か射手座は一位だったはず

元々、占いとか信じてるタチではない
だからと言って毛嫌いしてる訳でも無いけれど、とにかく信じてない
だけど自分も単純な生き物だったらしく
一位なんて言われたら、ちょっとは良い事あるかななんて思ったり
してた

その仕打ちがコレか
やっぱ信じるもんじゃないなとか思ってると

「とりあえず座りなよ」

と、優しい声が聞こえた

ふむ。
なるほど。
女受けが良さそうな顔してやがる

捻くれたアタシがそう思ったその人は
まぁ、俗に言うイケメン

不自然にならない程度に遊ばせた茶髪は耳位の長さ
クリッとしたブラウンの瞳に小ぶりな鼻
薄い唇に程よく焼いた肌
体も結構引き締まっているようだ
白のポロシャツにVネックの焦げ茶のニット
下はストレートのジーンズに黒革のシューズ
多分、優しいお兄さんキャラ

キレたら怖いと思う

「えーっと、那央ちゃんだよね？」

そう言ってきたのはこれまたイケメン

黒髪をワックスで軽く流して、左耳だけシルバーのピアス
鼻筋通ってて薄い唇に白い肌そして、切れ長の黒い瞳
黒のワイシャツを第3まで開けて濃い色のジーンズをベルトで止めている
ワイシャツは多分シルクだし、履いてる革靴は多分バーバリー
シャツから覗くシルバーアクセサリーもジルコニア
多分金持ちなんだろうな
だけど、醸し出される雰囲気は兄貴的なもの

「アタシ名前言いましたっけ」

なんで知ってんだてめー
と目で訴えれば

「さっき美弥ちゃんがね。
春日に見惚れてたから気付かなかったかな？
今は俺だったみたいだけど？」

と返ってきた
自意識過剰なんじゃねーのコノ男
つーかあの男は春日っていうのか

「見惚れてなんていません
強いて言うならそのジルコニアのネックレス、似たような物持って

るなって思っただけです」

「へぇ…

運命…ってヤツかな？」

そう言ってこっちを見てくる男

バカじゃないのか…

なんで未成年相手に色気振り撒いてんだよ…

鳥肌がたったし

「笑えねー…」

小さく言ったつもりだった

「やっと本性出しやがったかクソガキ」

…

「お互い様だろ

クソガキの相手じゃなくてあっちのおねーさま方の方に行けば？」

いつの間にかこいつと2人、隔離状態

少し離れたところで男女8人が談笑している

「俺は自分から行かなくても来るから別にいーの

そう言う那央は？」

「アタシだって好きで来てる訳じゃない

てか、いきなり呼び捨てかよ…」

これだからイケメンってやつは困る

「ふーん…
じゃあさ、俺の事は燈雅(とうが)って呼びな
それでおあいこ」

結局あんたが主導権握んのかよ…
て言うか、6個も上のヤツを呼び捨てか…

「分かったよ…燈雅」

「なんかさ、もうちょっとなんかねーの？
ホラ、年上をいきなり呼び捨てする事に戸惑いとかさ」

「生憎と、捻くれたアタシにそんな可愛い事は出来ないな」

「…お前16だろ？
可愛いくねーガキ…」

そりゃ結構な事で。

「でも、気に入った」

その一言には嫌な予感しかしなくて
嫌な予感ほど当たるってもので

それが悪魔の言葉だったと思うのはもう少し後の話

その後は…

気付いたら燈雅のベッドだった
隣に燈雅が居たし、アタシの身には赤い跡があったし
分かりたくは無いけれど、分かってしまったのは仕方ない
サイドボードにあった時計は3時を差していた
だんだん睡魔が戻って来る中で思った事
やっぱり占いなんか信じない

プロローグ（後書き）

うん。那央ちゃんやらかしたね。
ちなみに、那央ちゃん１６歳、燈雅２２歳設定でお送りします。

初めての朝（前書き）

那央ちゃん

初めての朝

ゴソッ…

「…んっ……んんん…ん？」

「は？え？ちょっ、えええぇぇぇ！？」

んだよ…

朝っぱらから騒々しいな…

「ちょ、待てよぉぉぉぉ！」

何がだよ

「なんだなんだ何なんだっ！」

コッチのセリフ

「あー！もうっ！落ち着けっ！」

「アンタがな」

「うぉっ！びっくりした…」

「朝っぱらから五月蝿いんだけど」

「や、だって…え？なんで？」

なんでって…
昨日何故かコイツに気に入られたアタシはあの後お持ち帰りされたようで…

「俺…やらかした？」

「うん」

「うわ即答ー」

それ以外に何を言えと？

バサッ

「ちょ、」

「？」

「おまっ、何で隠さねぇんだよバカッ！」

「だって昨日充分見られちゃったし
イタタタタ…手加減して貰えなかったし？」

マジで痛いわ
まさか自分がこうなるとは思ってなかったけど…
でもアレだな思ったより痛くはなかった。
少なくとも、美弥の言ってたのよりは痛くない
『痛いんだよ～！もうね、世界の終わりって位痛いの！』
…世界の終わりって痛いのか？

「悪ぃな…」

「ん。」

「あのさ、俺、昨日の事覚えてねぇんだ」

「だろうね」

「最低だよな…」

「最低だね」

「ちょっ、そこはさ『そんなことないよ!』とか無いの?」

「あるはずないでしょ」

「だよな…」

「でもお前さ、案外胸デケェのな」

「…どーも」

どうでもいいわそんなもん

今何時だよ…
9時…朝帰りって初めてだからな
なんて説明しようか
と言うかコイツはアノ場に居た人達に何て言って来たんだ？

「何してんだテメェ」

「いや、何ってナニ？那央ちゃんの身体検査」

「…さっきの狼狽えっぷりは何処行った？」

「アレは別
俺じゃなかったの。分かる？」

分かんないけど

「テメェなんて言っちゃって…
お仕置き希望者？」

「…燈雅」

「よく出来ました

…さっきから息が荒いんだけど？」

体中を這いまわる手は、身体検査のソレとは全く違くて
体が熱くなってる事なんて、息が荒くなってる事なんて言われなくても分かってる
燈雅の胡坐の中に座らされて
背を向けていることが唯一の反抗で
でもそれさえも出来なくなりそうで

「知らなっ…」

「俺さぁ…覚えてないって言ったろ？
だからさ、ちゃんと記憶に残したい訳」

「…っざけんなっ」

「おいおい俺に反抗していいんだ？」

そう言うアイツの顔は悪魔にしか見えなくて
ニヒルに笑ったのを見ながら、やっぱりイケメンなんだなぁ…
なんて思ってた

「かっわいいねぇ…テイク2いこうか

手加減なしでね」

…今日の占い絶対最下位だ

初めての朝（後書き）

んー書き方変わっちゃたかなぁ？
…これって、ムーンライトの方へ移すべきですかね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9958z/

星座占いなんて信じないっ！改

2011年12月31日00時45分発行